

2003年から05年に、橿原考古学研究所、王寺町教委合同で、国道168号線の拡幅事業にともなう王寺小学校の運動場の発掘調査が行なわれ、片岡王寺の中心伽藍を取り囲む遺構や建物跡が確認された。また平城宮と同じ軒瓦・鬼瓦が出土したことから、平城宮と密接な関係が推定され、皇族出身者が片岡王寺の建立に関わっていた可能性が高まったと報告されている。

この地は飛鳥時代・7世紀前半に創建された古代寺院遺跡で、王寺町の名前の由来にもなっている「片岡王寺」の中心伽藍が想定される場所である。現在、小学校校舎が建っているが、明治20年頃まではこの寺院の建物基壇跡や礎石などが残っていた。寺院は、南から順に塔・金堂・講堂が一行に並び四天王寺式の伽藍配置が推定されていた。



出土遺物の
軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦類

放光寺由緒書きから

当寺はもと片岡王寺とも称せられ、敏達天皇の皇后の発願により、聖徳太子が建立したといわれる。また『放光寺古今縁起』によると、敏達天皇の第三皇女・片岡姫王が建立したともいわれ、用明・推古の天皇や聖徳太子、奈良時代には聖武天皇が興隆につくされた。寺は金堂・講堂・食堂・五重塔・経蔵・鐘楼・四方の諸門や廻廊などを完備した荘麗な大伽藍であった。

平安中期の永承元年(1047)六月、雷火で金堂、廻廊などを焼失し、康平三年(1060)に興福寺衆徒のために洪鐘を奪いとられ、以来寺運は衰退し、戦国の元龜三年(1572)松永久秀の兵火を蒙り、寺跡を遺すのみとなった。

その後、江戸時代の元禄の頃となり、禅宗の一派として中国より伝来した黄檗宗の名僧鐵牛禅師により再興され、以来黄檗宗の僧侶が代々当寺に住し、法燈が再び片岡の里に光を放ったが、明治維新の廃仏毀釈で再び打撃をうけ、現今の本堂は、僅かに昔日の片影をとどめるものである。

現在当寺では、毎年七月十七日に「大施餓鬼法要」が営まれ、『十七夜』として親しまれている。

月も日も隈なき空は放光寺 霧はれ渡る片岡の山 (御詠歌)

片岡女王伝説

片岡王寺は、聖徳太子の娘の片岡女王が建立したという伝説が根強くあります。

片岡女王は聖徳太子の長男山背大兄王の妹。643年蘇我入鹿に攻められて、山背大兄王の上宮王家が滅亡した時、片岡女王だけはこの片岡に居たために生き延び、一族の菩提を弔うために一寺を建立、それが片岡王寺で寺名の片岡王は彼女のことだということです。

放光寺の由緒書きでは、片岡姫王は敏達天皇の娘だとされていますが、いずれにしるこの寺の創建に王家の女人が関わったという伝承があったのでしょ

う。片岡女王は実在性の高い人物といわれます。その名前から片岡に縁があったことも事実でしょう。あるいはこの地に勢力を持っていた上宮王家に近い豪族の元で養育されたとも考えられます。

聖徳太子の片岡山の飢人伝承が伝えるように、ここは太子の伝承が色濃く残るところ、そして太子葬送の道が伝わる場所、その地の建立された寺院に王家の女人が深く関わっていたとしたら、それは太子の娘であったという話が生れるのは、それほど不思議ではないでしょう。